

イスラム医学における「非自然要素」

矢口 直英

東京大学大学院人文社会系研究科博士課程

受付：平成21年10月22日／受理：平成22年2月9日

要旨：西洋医学史で頻出する概念の「非自然要素」とは人間の本性に支配されないものを指す。生理的・心理的な事柄から周囲の環境にわたり、生きる限りその影響を免れ得ない。一般的には大気、飲食物、運動と静養、睡眠と覚醒、排出と保持、精神的現象の6種類として中世では一種の衛生学や養生訓を形成し、病気の治療や健康の維持のために必要な知識であった。これらの健康への影響が知られてから「6つの非自然要素」という理論が成立するまで長い時間を要した。その起源はガレノスだが、「非自然」とは呼ばれていない。イスラム圏の医学においても医学者ごとに、その数や内容、名称にばらつきが見られる。イスラム医学の発展の中で「非自然要素」が理論として定式化したのは遅い時代のことだったと考えられる。

キーワード：イスラム医学、非自然要素、養生訓

§1. 序

「非自然要素」、ラテン語で *res non naturales* といえ、西洋の医学史で頻出する概念である。中世の医学者らによれば人間の身体に関わってくる事柄は「自然なもの (*natural*)」、自然に反するもの (*contra natural*)、そして「自然でないもの (*non natural*)」という3層構造に区分できる。「自然なもの」とは元素や体液、諸器官といった人間の身体の基本構成要素のことであり、自然あるいは本性に従うという意味で「自然なもの」と呼ばれる。一方、病気のような異常は「自然に反するもの」と呼ばれる。本来なら自然な状態にあるものが、病気の際にはあるべき状態から外れてしまうからである。最後の「自然でないもの」とは、自然に従わないもの、つまり(人間の)自然に支配されないものを指す。それは生理的、心理的な事柄から周囲の環境にわたる。人間が生きている限り何らかの影響を受けることは避けられないのである。それゆえ、「自然でないもの」について把握することは病気の治療のためだけでなく、特に健康を維持し病気を防ぐために必要不可欠な

のである。

環境が人間の健康状態に影響を与えることは古代ギリシア時代の医学者に既に知られており、理論化が試みられている¹⁾。人間が意志をもって行う一部の行為も人間の健康状態に影響を与えるとして、理論として医学の中に取り込まれていった。中世の西洋では「自然でないもの」は「6つの非自然要素 (*sex res non naturales*)」、一般的には空気、飲食物、運動と静養、睡眠と覚醒、排出と保持、精神的現象の6種類として一種の衛生学や養生訓を形成した。これは医学校で学ばれる教科書などで扱われており、中世の医者にとっての基礎知識に数えられる²⁾。

中世西洋の医学で規定されていた6つの「非自然要素」だが、定式化した理論として長い伝統をもっているわけではない。これらの要素が人間の健康状態へ影響を与えると知られてから、「非自然要素」という理論が成立するまで、また6つという数に整理されるまでには長い時間を要した。従来いわれている通り6つの「非自然要素」の起源を辿ればギリシアの医学者ガレノスに行き着くだろう。しかし、ガレノスの著作には「非自然要

素」として固まった理論はまだ存在しない。また以下で見ていくことになるが、ガレノス以後中世西洋の医学に至るまで医学の伝承や発展の過程を見てみても、中世西洋で常識化しているほどには「非自然要素」は登場しないことがわかる。

ギリシア医学はイスラム圏を通して西洋に伝わった。その際にイスラムの医学者らは受け取ったギリシア医学をそのまま西洋に伝えたわけではなく、独自の発展を加えている。同じ情報源から受け取った知識を、イスラムの医学者は様々に整理して医学を発展させていった。「非自然要素」もそうした発展のひとつに数えられるだろうが、簡単に「非自然要素」が理論として定式化することはなかった。関連する事柄の数や内容は医学者ごとにばらつきが見られるうえ、そもそも「非自然」と呼ばれていないことが多い。これまで「非自然要素」を扱った研究はいくつか存在するが、それらが利用した資料は全てラテン語訳である³⁾。しかし翻訳の過程で細かな表現が変わることは充分に考えられるので、イスラムの医学者の記述が正確に伝わっていない可能性がある。そこでアラビア語の原典を用いて、医学が西洋に伝わる時代までのイスラムの医学者らによる医学書の記述から、「非自然要素」という理論の変遷と発展を調査していく。まずはその原点にあたるガレノスの記述を確認する。

§2. 「非自然要素」の起源

多くの中世の医学理論と同様、「非自然要素」の起源はペルガモンのガレノス Galenus (129/130–199/200年⁴⁾) の著作にある。ガレノスは『医術 (Ars medica)』の第23章において身体の変化を引き起こす事柄を述べる。そこでは、後世に「非自然要素」として知られる6つの事柄が挙げられている⁵⁾。

身体は必然的なものによって (πρὸς τινῶν ἐξ ἀνάγκης), あるいは必然的でないものによって (πρὸς τινῶν οὐκ ἐξ ἀνάγκης) 変化を受ける。接せざるを得ないものを必然的なものと、それ以外を必然的でないものと私は言っている。取

り巻くもの [空気] との日常の交わり、食べること飲むこと、覚醒と睡眠は自身にとって必然的だが、剣や野獣に [晒されるの] は必然的ではない。それゆえ身体に関する技術は原因の第1の類 [必然的なもの] に従事するのであって、第2の類 [必然的でないもの] にではない。身体を変化させる必然的なものがいくつであるのか分類して、それぞれに適する健康の原因の類を見つけよう。取り巻く空気との交わり。次に全身のあるいは部分の運動と静養。3つ目は睡眠と覚醒。4つ目は摂取されるもの。5つ目は排出されるもの、あるいは保持されるもの。6つ目は精神的現象⁶⁾。身体は必然的に、これら全ての影響下に置かれることになる⁷⁾。

4つ目の「摂取するもの」とは食べ物や飲み物を意味するため、ここで挙がる6つの事柄は一般的な「非自然要素」と同等のものを指している。しかし個々の要素の順番は異なっており、ギリシア医学そしてイスラム医学が発展していく中で整理されていったと考えられる。さらに重要なことだが、ガレノスが用いている総称は「6つの必然的なもの」であって「非自然」ではない⁸⁾。

その一方でガレノスが「自然に沿わないもの」つまり「非自然」という名称を使用している箇所は存在する⁹⁾。『初心者のための脈について (De pulsibus ad tirones)』の第9章において脈拍は様々な事柄のために変化するとガレノスは述べ、それら要因を3つのグループに区分する。第1は「自然に沿うもの (κατὰ φύσιν)」、第2は「自然に沿わないが自然を超越しないもの (οὐ κατὰ φύσιν, οὐ παρὰ φύσιν)」、第3は「自然を超越するもの (παρὰ φύσιν)」である。第1グループの「自然に沿うもの」には性別、気質、体格、年齢、季節、地域、妊娠、睡眠、覚醒、後天的体質、後天的気質が挙げられている。第2のグループの「自然に沿わないもの」には運動、温水の入浴、冷水の入浴、大量の食事、ブドウ酒、水、その他の栄養となったり温めたり冷やしたりできるものが含まれる。これら両グループに含まれる要因が量的に過剰なら「自然を超越するもの」となり、第3のグ

グループに入る。量的に超越するものに加えて、第3グループには「種類として自然を超越するもの」も属し、これは生命の力を「浪費させるもの」とそれに「負担をかけるもの」に大きく分かれる。「浪費させるもの」には栄養の不足、悪性の病氣、精神的現象、激しい痛み、長い痛み、異常な排出が、「負担をかけるもの」には器官の様々な疾患が分類されている¹⁰⁾。

ここで使用されている名称から「非自然要素」との関係が期待されるが、「自然に沿わないもの」のグループに含まれる要素は『医術』における「必然的なもの」とは一致しない。共通するのは運動、食事、飲み物（ワインや水）に限られる。後者にある空気（季節や地域として）や睡眠はここでは「自然に沿うもの」のグループに含まれており、排出されるものや精神的現象は「自然を超越するもの」の中に見出されるのみである。

さらに『脈の原因について (De causis pulsuum)』の第3巻の冒頭を見ると、「それら [脈拍が変化する原因] には「自然を超越するもの」、「自然に沿ったもの」、そしてこれらの中で人々が「自然に沿わない」と呼んでいるものに分類される。」¹¹⁾とあり、「自然に沿わないもの」がガレノス以前から使用されていた名称であることがわかる。「自然に沿わないもの」がガレノス自身の作った名称でないとすれば、『医術』における「必然的なもの」の概念と重ならなくてもおかしくない。

ではガレノスの「必然的なもの」が指す要素は「非自然要素」と呼ばれるようになるまで、どのような過程を辿ったのか¹²⁾。ギリシア医学を受容したイスラム医学における発展を見ていくことにする。

§3. イスラム医学での「非自然要素」

§3.1. フナイン・ブン・イスハーク

数多くの医学書や哲学書をギリシア語からアラビア語へ翻訳したことで知られるキリスト教徒、フナイン・ブン・イスハーク Ḥunayn ibn Ishāq (808–873年) が自ら著した医学書の中で特に重要なのが、『医学問答集 (al-Masā'il fī al-ṭibb)』あるいは『医学入門 (al-Madkhal fī al-ṭibb)』である。

これは医学で必要とされる基礎知識を問答形式で教える書物となっている。伝承によればこの著作はまずフナインが手がけたが完結せず、彼の死後に甥のフバイシュ・ブン・アル＝ハサン Ḥubaish ibn al-Hasan (860年頃活躍) によって完成したという¹³⁾。その後、医学の入門書として広く普及した。この著作の人気はイスラム圏に限らず、ラテン語に訳されたものが西洋でも広まった¹⁴⁾。『ヨハンニティウスの医学入門 (Isagoge de Johannitius)』あるいは『ガレノス・テグニ入門 (Isagoge de Johannitius ad Tegni Galeni)』と呼ばれる。ヨハンニティウスとはフナインを指し、後者のテグニとはガレノスの著作『医術』のことである。『医学入門』はガレノスの『医術』、ひいてはガレノス医学全体の入門書として受け取られた。その結果、例えばサレルノの大学で必須教科書群 (アルティセラ Articella) に算入されるほど重視されることとなった¹⁵⁾。ラテン語の『医学入門』は問答形式ではなく簡潔な論説で、またかなりの部分を削除しているなどアラビア語版の単純な翻訳ではないので、別々に検討する意味はあるだろう。『医学問答集』では「非自然要素」はどのように扱われているのか、まずアラビア語の原典を、それからラテン語訳の『医学入門』を見ることにする。

『医学問答集』では2箇所、「非自然要素」にあたる事柄の記述が現れる。ひとつはフナインによる記述とされている部分 (第3章) に、もうひとつはフバイシュによる記述とされている部分 (第8章) にある。フナインはまず第1章において人間の身体の構成要素を「自然要素 (al-umūr al-ṭabī'iyya)」¹⁶⁾として説明し、第2章において「自然から外れた状態」と呼んで病気を述べる。そして、続く第3章で健康や病氣の原因が扱われる。そこでは原因が3つに分類されている。第1の「自然な原因」は健康を生み、第2の「自然から外れた原因」は病気を生む。そして第3の「健康と病氣に共通する原因」というグループに、「非自然要素」にあたる事柄が登場する。

健康と病氣に一般的で、共通する原因 (al-

asbāb al-mushtaraka)の種類はいくつか? — 6つ。 — それは何か? — [1] 人間の身体を取り巻く空気, [2] 食べるものと飲むもの, [3] 運動と静養, [4] 睡眠と覚醒, [5] 排出と滞留, [6] 精神的現象¹⁷⁾。これら6つは、量、質、時、順序に関してあるべき程度に適合していると、健康を維持し、またそれを生じる。量、質、時、順序に関してこの反対のように機能すると、病気を生じ、またそれを維持する¹⁸⁾。

一方フバイシュによる追加部分とされる第8章は「医学の理論の別の区分について」と題しており、第3章の理論とは由来が異なる可能性が示唆されている。ここでは「自然でない要素」と呼ばれている。これは言い換えれば「非自然要素」ということである。

他の人々は医学の理論と実践を前述の区分ではなくどのように区分するのか、彼らが自然なものに加えたものはいくつか、またその加えられたものとは何か? — 一部の医者は医学の理論を以下の区分によって区分する。彼ら曰く、医学の理論は自然要素の理論の知識、自然でない要素の知識、自然な事象から外れた要素の知識に区分される。彼らは既に述べたあの7つの自然要素の他に他の4つの、それらに密接に結びついた要素を加えた。それは、人間の年齢、体色、体格、男性と女性の差である。 — 自然でない要素 (al-umūr allatī laysat bi-ṭabī'iyya¹⁹⁾)はいくつか? — 6つのもの。 — それは何か? — 第1は人間の身体を取り巻く空気。第2は運動と静養。第3は入浴²⁰⁾。第4は食べ物と飲み物。第5は睡眠と覚醒。第6は排出と保持、そして性交²¹⁾。ある人々はこれに精神的現象を加える²²⁾。

これに続く年齢、体色つまり肌の色、体格、性差の記述の後で、「自然でない要素」の6つが詳細に語られる。空気は季節、星の出入り、風、土地、蒸散物(腐っているものから蒸散するもの)にさらに分けられ、運動と静養、入浴、食べ物、

飲み物、(薬品)、睡眠と覚醒、性交、精神的現象の順で扱われており、第8章の最初での分類と実際の記述には若干の違いがある。つまり排出と保持についての記述が無い。

第3章(フナイン)と第8章(フバイシュ)の記述を比較してみると、大きく異なっているのは入浴の扱いである。後者では6つのうち3番目として重く扱われているのに対し、前者には含まれていない。その代わりに第3章で6つ目に数えられているのは精神的現象である。しかし、精神的現象が第8章の記述の後半では追加要素として同等に扱われていることから、精神的現象と入浴が完全に交代してしまったとは考えにくい。むしろ第8章で語られている人々の理論においては入浴が重要なものとなっていて、他の6つの要素に続く位置を得ていたと考えるべきだろう²³⁾。一方それ以外の要素については、食べ物と飲み物を表す表現が異なるのみである。したがってアラビア語の『医学問答集』では、ガレノスの「必然的なもの」が「健康と病気に共通する原因」(フナインの箇所)と「自然でない要素」(フバイシュの箇所)の2種類の名称で呼ばれていることになる。

さてラテン語訳の『医学入門』²⁴⁾で「非自然要素」に当たる事柄が最初に現れるのは、年齢、体色、体格、性差の記述に続く部分である。本文にはそれら一連の事柄をまとめる総称などは挙げられておらず、いきなり空気についての記述から始まっている。まず空気の変化が季節、星の出入り、風、土地、蒸散物の5つにさらに分けられている。続いて運動と静養、入浴、食べ物、飲み物、睡眠と覚醒、性交、精神的現象が述べられる。これらの記述の順序は『医学問答集』の第8章と全く同じであり、その前の年齢などの記述を含めてフバイシュによる部分(第8章)の翻訳にあたる²⁵⁾。

次にこれらの事柄が登場するのは健康や病気の原因に関する部分で、『医学問答集』のフナインによる第3章の部分に対応する。

健康と病気に共通する全ての原因は6通り。そのひとつは人間の身体を取り巻く空気。そして食べ物と飲み物、運動と静養、睡眠と覚醒、

排出と保持，精神的現象。これらの全てが，量，質，時，方法，順序に関してあるべき中庸にあるなら，生じることから健康を守る。これと反対の何らかのことが生じると，病気が生じて維持される²⁶⁾。

『医学入門』の構成を見ると，まず最初に7つの自然要素が説明され，次に『医学問答集』の第8章で追加されている年齢などの4つが来る。続いて上記の諸要素が語られる。その後には病気についての記述があり，健康や病気の原因の説明はその次に回されている。アラビア語版とラテン語訳では文章の構成がずれているわけである。ラテン語訳のこの順序からは，明確に「非自然」と名付けられてはいないが，「自然なもの」，「自然でないもの」，「自然に反するもの」という区分が意識されていると推測できる。

興味深いことに12世紀および13世紀に書かれた2つの写本では，上で引用した箇所の直前に「非自然要素は6つ。空気，運動と静養，食べ物と飲み物，睡眠と覚醒，排出と保持，精神的現象」という文章がある²⁷⁾。おそらく元々の翻訳では登場しない「非自然要素」という表現を使った総括が後に挿入されたのだろう。翻訳の『医学入門』とは別の経路で「6つの非自然要素」の概念が西洋に伝わり，定着していたということになる。

フナインの『医学問答集』では「健康と病気に共通する原因」と「自然でない要素」という2種類の総称が登場した。その翻訳『医学入門』の場合，用いられている総称は前者だけで，「非自然」という表現は一部の写本にのみ現れる。それらが現れる2箇所では挙げられる要素は統一されておらず，それぞれ順序も異なる。しかし，そこに登場する事柄がガレノスの『医術』の「必然的なもの」に依拠しているのは確かで，加わるものがあったとしても6種類という基本的な数が共通している。この著作が問答形式を採り，まず「いくつあるか？」という問いから始めるため全体の数が強調されることになる。フナインが規定したこの6という数は，後代の医学者らが理論を整理していくなかで大きく影響していったと思われる。これ以

降，ガレノスの挙げた6つの事柄に入浴と性交という2つの要素が加えられていくのだが，これら2つは6種類の中に編入されていくからである。

以下ではフナイン以後イスラム医学の中で「非自然要素」の概念は定着したのか，特にこの概念自体と名称は結びついていったのかを，ラテン語に翻訳されて西洋に伝わった医学者らの著作を中心に調査する。

§ 3.2. ラージー

アブー・バクル・アル＝ラージー Abū Bakr al-Rāzī あるいはラテン名ラーゼス Rhazes (865–925年) は数多くの著作を残している。代表的な医学書のひとつ『マンスールの書 (al-Manṣūrī fī al-ṭibb)』はラージーがサーマーン家の君主マンスール (アブー・サーリフ・マンスーフ・ブン・イスハーク Abū Ṣāliḥ Manṣūr ibn Ishāq) のためにまとめた医学書である。12世紀には『Liber ad Almansorem』としてクレモナのゲラルド Gerard Cremonensis (1114頃–1187年) によってラテン語に翻訳された。記述が簡潔なことから，この著作は西洋で16世紀に至るまで医学の教科書として使用され続けた。『マンスールの書』の第4巻は「健康維持について」と題しており，そこで扱われている事柄は一部が「非自然要素」と重なっている。具体的には運動，睡眠，食べ物や飲み物，身体の余剰物の掃除，居住地，思案，血液の排出，下剤，嘔吐，性交，入浴，時期 [季節] に応じた身体の処置の順に記述がある²⁸⁾。身体の余剰物の掃除，血液の排出，下剤，嘔吐は「非自然要素」の呼び方でいえば排出に相当する。居住地の変化は空気の変化に通じ，(精神的) 思案とは精神的現象のことである。またフナイン・ブン・イスハークの『医学問答集』の第8章でフバイシュが含まれた性交や入浴も扱われていることになる。総称もなく整理もされていないが，「非自然要素」に含まれる一括りの事柄は意識されていると考えられる。

『マンスールの書』以上に重要な著作が『包括の書 (al-Hāwī fī al-ṭibb)』であり，これは13世紀に『Liber Continens』という題名でラテン語に翻

訳された、『包括の書』はラージーが収集していた過去の(翻訳されたギリシアやインドの)医学書の引用と彼自身の意見を、ラージーの死後に彼の弟子たちが編集したものである。そのため十分に整理された医学書とはいえない。前半は病気に罹る部位ごとに巻が分かれ、後半は腫瘍、潰瘍、発熱と病気ごとにまとめられており、最後に薬剤の情報などを集めた巻が並んでいる。問題の「非自然要素」を総合的に扱っている巻は無いが、一部関連する要素を集めた部分がある。それは『包括の書』第23の上巻²⁹⁾の冒頭。しかし章立てされているのは、食べ物と飲み物の用法および睡眠と覚醒のみである。著作の性質上その大部分を他の医学書からの引用が占めているのだが、ここにも「非自然」を含めて総称は一切見つからない。

これらラージーの代表的な医学書には「非自然要素」についての体系的な記述が無い。しかし『マンスールの書』には、「非自然要素」が健康に関係する一括りの事柄として把握されている様子がかすかに見られる。これと同様に、人間の健康に影響を与えるものとして「非自然要素」が述べられている箇所がラージーの著した入門書にある。『医学入門(al-Madkhal ilā šinā'at al-ṭibb)』の第5章でラージーは人間の気質が変化する原因について語る。彼はまず気質の原因を生来のもの、年齢、習慣の3つに分類する。そして生来のものである男女の性差と、年齢による気質の変化を述べる。その次にラージーは言う。

体色と健康[状態]は8つの区分に応じて変化する。まず身体を取り巻く空気。第2は食べるものと飲むもの、およびその欠乏。第3は睡眠と覚醒。第4は静養と運動。第5は身体の余剰物の排出、およびその体内での保持、つまり排出されるのが容易か困難か。男性の排泄物は10あり、女性も10ある。それは糞、尿、汗、鼻汁、唾、目やに、耳垢、精液、爪、毛髪、月経の血液、母乳である。第6は性交³⁰⁾、およびその欠乏。第七は入浴、およびその放棄。第八は精神的現象。それは怒り、哀しみ、不安、恐怖、快楽である³¹⁾。

ここで挙げられている8つの事柄は、入浴と性交という要素が独立していることを除けば、一般的な「非自然要素」そのものである。これら2つはフナインの『医学問答集』の第8章でフバイシュが述べた「自然でない要素」に含まれているもので、ラージーがフナインの著作を参考にしたとも考えられる。ただしこれらの事柄のラージーによる位置づけはフナインの場合と異なり、「自然なもの」や「自然に反するもの」に対する「非自然」という概念はあまり現れていない。というのも、上で引用した部分は『医学入門』の第3章から第5章まで扱う気質についてという話題の一部に過ぎない。その前後を見ると、第1章から第2章は元素について、第6章は器官についてである。これらは全て自然要素の説明の一環であるため、この記述においてラージーが「自然」と「非自然」の区分を意識していたとは考えにくい。

ラージーによる医学書を3つ検討した。後世の「非自然要素」にあたる健康に関係する事柄を、ラージーは一連のものとして把握していただろう。ただし、いずれの著作にも「非自然要素」はおろか総称は一切発見できない。『医学入門』で登場するその数は一般的な6つではなく8つだが、その内容は既にフナインの『医学問答集』に記録されているものと同じである。そのため、フナインが記録した「自然でない要素」が10世紀初めには既に一連の概念として把握されるようになっていたと思われる。「非自然要素」という概念が医学理論として詳細に語られるようになるのは、ラージーのすぐ後の世代のことである。

§3.3. マジュースー

アリー・ブン・アル=アッバース・アル=マジュースー 'Alī ibn al-'Abbās al-Majūsīあるいはラテン名ハリ・アッバス Haly Abbas (生年不明-994年)はゾロアスター教徒の家系出身の医学者である。彼が唯一著した医学書が『完全の書(Kāmil al-šīnā'at al-ṭibbiyya)』あるいは『王の書(Kitāb al-Malikī)』である。アフリカのコンスタンティヌス Constantinus Africanus (1020-87年)の『Liber pantegni』として、また1127年にはアンティ

オキアのステファノス Stephanus Antiochensus (12世紀前半に活躍) によって『Liber regius』としてラテン語に翻訳されて西洋に広まった。序文でマジューシーはラージーの『包括の書』の乱雑な構成を批判して、『完全の書』では健康の維持や病気の治療のために医者が知らなければならない事柄を説明すると語っており、医学理論を入念に整理して述べていく意図が読み取れる。事実、『完全の書』には当時知られていた医学理論が十分にまとめられているといえる。

マジューシーは『完全の書』を第1部「理論の部」と第2部「実践の部」に分ける。そして理論の部の第4巻までで「自然要素」についての説明を終えた後、その第5巻全体を「自然でない要素」にあてている。

自然要素の諸様態について、この技術を学ぼうとする者にとって探究のために十分なことは既に説明した。この箇所つまりこの章では、自然でない要素 (al-umūr allatī laysat bi-ṭabī'iyya) を述べることにしよう。これは人間が生き続ける限り必然的に関わることになる原因であり、6つの類からなる。第1は人間の身体を取り巻く空気、第2は運動と静養という類、第3は食べ物と飲み物³²⁾という類、第4は睡眠と覚醒、第5は自然な排出とその保持、第6は精神的現象³³⁾。自然な排出には、入浴、性交、排尿、排便、鼻汁、また同様の自然な排出が含まれる。精神的現象には、喜び、怒り、不安、悲しみ、怯えが含まれる。すなわち、これらの要素は人間の存在に伴うような本性的なものでも生来のものでもない。また同様に本性から離れたものでもない。

これらがあるべきように、量的にも質的にも時間的にも規則においてもあらゆる身体が必要とするように用いられているときには、自然要素はその「あるべき」状態に保たれ、「あるべき状態」との近縁性が生まれる。これによって身体の健康は自然な減び「死」の時まで持続するのである。この反対のように用いられるなら、身体はその本性的状態から外され、病気が

生じる。病人ならばその病気が保たれ、また増大する³⁴⁾。

「自然でない要素」について簡潔にまとめた後、マジューシーはそれらの理解がどうして必要であるのかを語る。なぜなら、生来のものではないが、関わり合うことなく生きることは不可能な事柄であるから。そこでは「非自然」という概念とガレノスの『医術』に由来する「必然的なもの」という概念の両方が登場しており、マジューシーの時代にはこれらの名称の両方で後世の「非自然要素」が呼ばれていたことがうかがえる。個々の内容についても『完全の書』以前の医学書と比べて、かなり詳細に述べられている。マジューシーによる各要素の詳細の説明は以下のように続く。空気の本性、季節の本性、本性的状態を外れた場合の季節の作用、空気が本性的状態を外れた場合の季節の作用、病気が起こる季節、星による空気の変化、風による空気の変化、土地による空気の変化(方角、高度、山の位置、海の位置、土壌)、蒸散物による空気の変化、伝染病を引き起こす空気、運動について、入浴の作用、食料について総論、食料の種類(植物、動物、飲料、香料)、衣類の作用、睡眠と覚醒の作用、性交の身体への作用、自然な排出、精神的現象³⁵⁾。これら挙げられている要素を大きく分類していけば、空気、運動、入浴、食べ物と飲み物、睡眠と覚醒、性交、排出、精神的現象となり、上の引用で分類されたものと多少異なっている。これはフナイン・ブン・イスハークの『医学問答集』にある「自然でない要素」とほぼ同じであり、マジューシーはフバイシュの記述に依拠していると考えられる。

マジューシーの著作は「非自然要素」をかなり詳細に述べているうえ、実際に「非自然」という総称で扱っている。そこでは「必然的なもの」の概念が「非自然要素」に組み込まれている。ガレノスに由来する概念と、由来を別にする「非自然」の概念が融合しているのである。そこで挙げられる事柄は一般的な6種類に加えて、排出と保持の一部として入浴と性交を含む。ラージーの著作では並列して語られていたこれら2つが6つの要素

に取り込まれたことで、ようやく「6つの非自然要素」はひとつの医学理論として成立したといえる。しかしマジュシー以後の医学者らの著作を見るとこれらは一括りの概念として継承されたようだが、「非自然要素」の名称を伴ったものとして定着したとは考えにくい。マジュシーの次の世代に活躍した、イスラム圏の医学者で最大の影響力をもったイブン・シーナーは「非自然」とは呼んでいない。

§3.4. マシーヒー

イブン・シーナーの著作を検討する前に、彼の同時代の医学書について触れておきたい。アブー・サフル・アル＝マシーヒー Abū Sahl al-Masīhī (970頃-1010年)はキリスト教徒であり、医学者としてだけでなく論理学者としても著名な人物である。彼の著作『百の書(al-Mi'a fī al-tibb)』は100の小論から成り立っている医学の概説書であり、教育用に使用された。大まかに分けて前半は医学理論を、後半が実践つまり実際の治療法を扱っている。

『百の書』のどの小論にも「非自然要素」を専門的に論じる箇所は無く、「非自然要素」に関する総称は現れない。しかしマシーヒーは「非自然要素」の個々の要素に、連続する小論を割り当てている。第10巻は空気、第11巻は居住地、第12巻は水源の説明に当てられている。第13巻から第18巻までは食べ物³⁶⁾と飲み物のことを扱い、第19巻は香料と衣類についてである。そして第20巻で睡眠と覚醒について、第21巻でマッサージについて、第22巻で運動と静養について語られ、第23巻は入浴、第24巻から第28巻までは様々な排出(下剤、嘔吐、瀉血)が述べられる。最後に第29巻で精神的現象³⁷⁾が扱われてから、第30巻の薬品の議論に移っていく。

これらの説明の一部には一連の関連性を述べている箇所がある。ひとつは第13巻「食べ物についての情報」の冒頭。身体を構成している元素が常に消散しているために食べ物を摂取しなければならないと述べた後である。「なぜなら、取り巻く空気もまたそれ[身体]に影響して消散させる。

運動[動き]、体操、精神的現象と同様である。それゆえ接触によって永久に身体は減少する。したがって、減少した分の代わりとなるものを永久に与える必要があり、代わりとなるものとは食べ物のことである。」³⁸⁾また第29巻「精神的現象について」でも、「食べ物と飲み物、睡眠と覚醒、運動と静養と同様に」精神的現象による変化は身体の本性に影響を与えると述べている³⁹⁾。これら2つの記述からは、マシーヒーが食べ物や飲み物、睡眠と覚醒、運動、精神的現象を身体に影響を与えるものとして捉えていることが読み取れる。

小論から構成される医学書のため、「非自然要素」という総称をマシーヒーが用いなかっただけという可能性はある。またこれら説明されている事柄が、彼の理論において「非自然要素」としていくつかのカテゴリーに大きく分類されているのかは判断しがたい。しかし、少なくとも個々の事柄が連続して全て説明されていることから、マシーヒーがこれらを一連の概念として考えているのは間違いない。個別に見れば、それぞれの要素に関する理論は医学に必要な知識として詳細に組み立てられている。

§3.5. イブン・シーナー

イブン・シーナー Ibn Sīnāあるいはアヴィセンナ Avicenna (980-1037年)はイスラム圏を代表する哲学者、医学者である。医学における彼の主著『医学典範(al-Qānūn fī al-tibb)』⁴⁰⁾はラージーの『包括の書』やマジュシーの『完全の書』を凌ぐ評価を得た。多数の注釈書や要約書が作られるなど、イスラム圏では他の医学書を駆逐するほどの人気を博した。西洋ではまずクレモナのゲラルドが12世紀に『Canon』としてラテン語に翻訳した。その後アンドレアス・アルパグス Andreas Alpagus (生年不明-1520年)による改訳が作られ、『Canon』は大学の教科書として用いられ続けた。『医学典範』の第1巻は「医学概論」と題し、医学の理論部分を取り扱っている。その冒頭部分で「自然要素」について述べてから、イブン・シーナーは身体の状態、つまり健康や病気の原因の説明に入る。そこではまず原因が作用の仕方に応じ

て3つに分類される。身体の内から媒介を通じて間接的に作用する原因である「先行の原因」、身体の内から直接作用する原因である「結合の原因」、身体に由来せず外から作用する原因である「始原の原因」である。そしてイブン・シーナーは原因のもうひとつの分類を次のように述べる。

身体の状態を変化させ、またそれを維持する原因は、必然的で人間が人生において逃れることのできないものか、あるいは必然的でないのである。必然的な〔原因〕(al-darūriyya)には6つの類がある。〔身体を〕取り巻く空気という類、食べるものと飲むものという類、身体的な運動と静養という類、精神的な運動という類⁴¹⁾、睡眠と覚醒という類、排出と保持という類⁴²⁾。

運動と静養、および精神的現象の2組を身体的動静と精神的動静と表現しているという違いはあるが、ここで挙げられている6つは一般的な「非自然要素」に等しい。イブン・シーナーが用いている総称は身体の状態（つまり健康や病気）に関する「必然的な原因」であり、ガレノスの『医術』における表現と同じである。これらの要素は上で挙げられたのとは異なる順番で説明される。身体を取り巻く空気に影響をもたらす季節、天体、高度、山や海的位置、風、土壌、そして居住地の情報に続いて、運動と静養、睡眠と覚醒、精神的な運動、食べるものと飲むもの、保持と排出が述べられる。これらとは別に薬品が作用する仕組みの分類をはさみ、入浴について語られる箇所が来る。

さらに健康維持についての部分でイブン・シーナーは次のように述べる。

健康維持の技術で最も大事なことは、既述の必然的な共通の原因の調整である。7つの事柄の調整に最大の留意を払うべし。[1] 気質の調整⁴³⁾、[2] 摂取するものの選択⁴⁴⁾、[3] 余剰物の除去、[4] 構造の維持、[5] 呼吸するものの改善、[6] 衣服の改善、[7] 肉体的および精神的運動の調整。またある点で睡眠と覚醒がこれ

に含まれることもある⁴⁵⁾。

ここで挙げられている事柄を整理すると、呼吸するものは空気のこと、摂取するものは食べ物や飲み物のことであり、余剰物の除去は排出に当たる。この3つに、7つ目の肉体的運動と精神的運動、最後の睡眠と覚醒を加えると、「必然的な原因」は網羅されていることになる。この後に実際に健康維持のための方法として言及されているのは、運動（マッサージを含む）、入浴、飲食、睡眠、余剰物の除去である。上で引用した「必然的な原因」の記述と合わせて考えると、入浴は一般的な6つの事柄の外側ではあるが、近縁のものとして捉えられているといえる。また性交についての記述は見つからない。イブン・シーナーの『医学典範』では入浴を含む「非自然要素」が「必然的な原因」として扱われているわけである。

また『医学典範』に次ぐイブン・シーナーの有名な医学書が『医学の詩 (Urjūza fī al-ṭibb)⁴⁶⁾』である。これは韻文の形式による医学の学習書であり、『Cantica』としてラテン語に翻訳された。『医学の詩』のアラビア語原典では「非自然要素」は「必然的要素 (al-umūr al-darūriyya)」としてのみ登場する。冒頭で7つの「自然要素」について述べてから、イブン・シーナーの詩は次の通りに続く。「必然的要素」についての記述。第1は空気(131-32行)、空気への星の影響(133-37行)、街と山に応じた空気の変化(138-42行)、海と風に応じた空気の変化(143-47行)、土と水の近さに応じた空気の変化(148-50行)、住居に応じた空気の変化(151-53行)、衣服に応じた空気の変化(154-55行)、嗅ぐための香草や香水に応じた空気の変化(156-59行)、色の視界への作用(160-61行)。第2の「必然的なもの」、食べるものと飲むもの(162-73行)、飲む水やそれ以外のものの力(174-79行)。第3のもの、睡眠と覚醒(180-88行)。第4のもの、運動と静養(189-96行)。第5のもの、排出と保持(197-208行)。第6のもの、精神的現象(209-12行)⁴⁷⁾。

入浴は203-204行に⁴⁸⁾、性交は205-208行に排出と保持の一環として言及される。これは一般的

な「非自然要素」と完全に合致する。それでもイブン・シーナーは「非自然要素」をあくまでも「必然的」なものとして述べている。しかしラテン語訳の『Cantica』では、アラビア語版が「必然的要素」と言っている箇所(131行の直前)に「非自然」という表現が挿入されており、「非自然かつ必然的要素について、第1は空気について(De rebus non naturalibus necessariis et primo de aere)」⁴⁹⁾となっている。またイブン・ルシュドによる『医学の詩注釈』のラテン語訳の該当箇所にも同様に、「非自然」という表現が挿入されたままである。そこでは「非自然[かつ必然的]要素について、第1は空気について」というように『Cantica』とほぼ同じ表現が用いられている。ほぼ同じというのは一部の写本のみでの表現として「必然的」という単語があるため、むしろ大半の写本では「非自然」とのみ呼ばれている⁵⁰⁾。『医学の詩』は12世紀にクレモナのゲラルドによって翻訳されたらしい。またアヴェロエスの注釈は13世紀に翻訳された⁵¹⁾。これらを考慮すると、西洋では遅くとも13世紀にはイブン・シーナーの挙げる6つの「必然的要素」が「非自然要素」という表現に置き換えられるほどに、「非自然要素」という名称込みの概念が定着していたことが想像できる。

イブン・シーナーは『医学典範』でも『医学の詩』でも共通して「必然的」なものとして「非自然要素」にあたる事柄を捉えている。内容的には一般的な6つの要素に加えて入浴が、『医学の詩』に限っては入浴と性交が数えられる。ただし数えられている要素はどちらの著作でも6つであり、それとは別に入浴が単独で挙げられている『医学典範』と、入浴と性交が排出の一種に数えられている『医学の詩』という違いがある。6つの要素に加えて入浴と性交が関わっているのはマジュシーと同じであるため、彼らが活躍した10世紀から11世紀初頭には概念としての「非自然要素」自体はイスラム圏に浸透していたと思われる。しかしイブン・シーナーがこれらの要素を「非自然」とは呼んでいないことは、「非自然」という総称は定着していなかったことの証だろう。

§3.6. イブン・ルシュド

イブン・シーナーと同じく哲学者としても有名なイブン・ルシュド Ibn Rushdあるいはラテン名アヴェロエス Averroes (1126–98年)はイスラム圏の西方で活動していた。イスラム圏ではイブン・シーナーの『医学典範』ほど知られることはなかったが、イブン・ルシュドは『総説の書(al-Kulliyāt fī al-ṭibb)』という医学書を残している。これは医学の理論部分のみを扱う書物で、実践部分つまり病気の治療法や健康維持の規則を扱うイブン・ズフル Ibn Zuhrあるいはラテン名アヴェンゾアル Avenzoar (1092頃–1162年)による『治療と養生の助け(Taysīr fī al-mudāwāt wa al-tadbīr)』と合わせて一組になるよう計画されたものである。『総説の書』はラテン語に翻訳されて『Colliget』として知られた。

医学の実践部分を別の著作に委ねているため、『総説の書』はアラビア語で書かれた他の医学書とは多少異なる構造をしている。全部で7つの巻から成り、第1巻が身体の解剖、第2巻は「健康について」と題して通常の状態における身体の構成要素を扱う。第3巻は病気について、第4巻は健康や病気を示す徴候について、第5巻は薬品や栄養物に関して個々の品物について述べる。第6巻は健康維持の方法、第7巻は病気の治療についての概論である。この中には「非自然要素」という項目も、それらの要素がまとめて扱われている特定の箇所も存在しない。しかし、部分的に「非自然要素」の伝統を継ぐと思われる記述がある。第4巻における脈拍に関する説明で年齢や性別などに応じて脈拍が変化すると語り、イブン・ルシュドは次のように続ける。「これらは脈拍に変化を引き起こす気質である。睡眠と覚醒にもまた脈拍への影響がある。[身体の]外部にある脈拍を変化させる要素には、4つの季節、食べ物と飲み物、入浴、さらに脈拍を変化させるような精神的現象がある。」⁵²⁾この記述はガレノスが『初心者のための脈について』で述べていることを思い起こさせる。

イブン・ルシュドはまた第6巻「健康維持の方法」の冒頭で身体の[状態の]悪化を生む事柄と

して、空気の変化、不適切な運動、精神的現象を挙げる。「そのため健康維持は、適切な糜汁になる食べ物、量、時、場所に従った使用、余剰物の排出、空気の調整、気質の悪化に繋がる精神的現象の回避以外とは結びつかない。これらのうち最も大事なものは、医学の規則に従った食べ物の使用および余剰物の排出である。これが、この技術[医学]において最も多く語られることである。」⁵³⁾またこの直後イブン・ルシュドは余剰物を排出する方法として、運動、マッサージ、薬品に加えて入浴を挙げる。イブン・ルシュドの著作では「非自然要素」やそれに通じる総称こそ現れないものの、これらの事柄は健康維持の観点で重要なものとして一括して理解されているのである。

§ 4. 結

以上で見たイスラムの医学者による「非自然要素」を整理すると3つに分けられる。ひとつは、フナイン・ブン・イスハークやマジューシーの場合のように一般的な6つの事柄が挙がり、さらに「非自然」という総称で呼ばれているもの。次はイブン・シーナーやラージー、マシーヒーといった人々の著作におけるもの。彼らは一般的な6つの要素(場合によってはそれ以上)を一連の概念としてまとめて説明しているが、総称は「非自然」ではないか、あるいは総称が挙がっていない。最後にイブン・ルシュドのように「非自然要素」の内容に関する直接的な記述が無いもの。しかし著作のいくつかの議論から、一括りの概念としての「非自然要素」は意識されていることがわかる。

西洋医学史で頻出する6つの「非自然要素」の発端はガレノスの『医術』にあるようである。しかしそこではまだ「必然的なもの」として説明されており、「非自然」という名前は与えられていない。反対に「非自然」という表現をガレノスが持ち出している箇所では、事柄は限定されていない。元来「非自然」という表現はガレノス自身が始めた呼称ではなく、6つの「必然的なもの」と「非自然」は結びついていなかった。時代を下ってギリシア医学を引き継いだイスラム医学になると、「非自然要素」にあたる事柄については多く

の医学書で、特に健康維持と結びつけて扱われており、一括りの概念として意識されているようである。ただし、そこに含まれる要素にはばらつきがあり、未だ固定したものにはなっていない。また「非自然」と呼んでいるのはごく少数の著者に過ぎず、ひと組の要素としての総称は与えられていないことが多い。ガレノスの場合と同様に「必然的」と呼ばれることもある。したがってイスラム医学においては、後世の「非自然要素」は関連性をもつ一組の事柄として流動的なまま伝えられていったといえる。

実際に「非自然要素」が医学理論として固定したのは、むしろ西洋でのアラビア語の医学書が西洋に伝わる過程のことだったと考えられる。イスラム圏の医学者で実際に「非自然」と呼んでいるのはフナイン・ブン・イスハークとマジューシーである。西洋で知られることになる「非自然」の直接の由来となるのはこのいずれかだろう。マジューシーの記述がフナインの著作に基づいて書かれていることを想定すれば、イスラム圏への概念としての「非自然要素」の定着に大きな役割を果たしたのは特にフナインの『医学問答集』であると考えられる。「非自然」という名称はイスラム医学では定着することにはならなかったが、西洋では彼らの著作がラテン語に翻訳されて普及し、「非自然要素」が広く知られることとなった。その結果、6種類一組の「非自然要素」が西洋で定着して定式化された。そして、イブン・シーナーの『医学の詩』のように別の名称を与えている場合ですら「非自然要素」という表現が挿入されるほどになったのだろう。西洋への「非自然要素」の伝達と定着において直接の影響を与えたのが具体的に誰なのか、医学書のラテン語訳の検討が必要である。

注

- 1) 例えばヒポクラテス『空気、水、場所について』では、気候や習慣が住民の健康状態の傾向に与える影響が論じられている。
- 2) Nancy G. Siraisi. *Medieval & Early Renaissance Medicine*. Chicago: University of Chicago Press; 1990. pp. 97-101.

- 3) 「非自然要素」の起源および西洋世界での発展についてを扱った研究は、Rather 1968 とそれに対する返答として発表されたいくつかの論文がある。L. J. Rather. The “Six Non-Natural”: a note on the origins and fate of a doctrine and a phrase. *Clio Medica* 1968; 3: 337–47. Saul Jarcho. Galen’s Six Non-Naturals: a bibliographic note and translation. *Bulletin of the History of Medicine* 1970; 44: 372–77. Jerome J. Bylebyl. Galen on the Non-Natural Causes of Variation in the Pulse. *Bulletin of the History of Medicine* 1971; 45: 482–85. Peter H. Niebyl. The Non-Naturals. *Bulletin of the History of Medicine* 1971; 45: 486–92. Luis García-Ballester. On the Origin of the “Six Non-Natural Things” in Galen. In Jutta Kollesh & Diethard Nickel (eds.) *Galen und das hellenistische Erbe* (Sudhoffs Archiv Beihefte: Heft 32). Stuttgart: Steiner; 1993. pp. 105–15.
- 4) ガレノスの没年については議論されている。Nutton によれば、アラブらは伝統的に216/17年をガレノスの没年としていた。Vivian Nutton. *Ancient Medicine*. London: Routledge; 2004. pp. 226f.
- 5) Rather 1968, p. 339.
- 6) それぞれの原語は以下の通り。ή όμιλία τοῦ περιέχοντος άέρος (取り巻く空気との交わり), κίνησις καί ήσυχία (運動と静養), ύπνος καί έγρηγόρσις (睡眠と覚醒), προσφερόμενοι (摂取されるもの), έκκρινόμενοι ή έπεχόμενοι (排出されるもの, あるいは保持されるもの), ψυχικῶν πάθη (精神的現象)。フナイン・ブン・イスハークによるアラビア語訳で用いられている訳語はそれぞれ、al-hawā’ al-muḥīṭ bi-abdān-nā, al-ḥaraka wa al-sukūn fī al-badan, al-nawm wa al-yaqza, mā yatanāwalu, mā yanba’īthu min al-badan wa yaḥtaqīnu fī-hi, al-a’rād al-nafsāniyya である。Jālīnūs. al-Šinā’a al-ṣaghīra. ed. Muḥammad Salīm Sālīm. Cairo: al-Hay’a al-Miṣriyya al-’Āmma lil-Kitāb; 1988. pp. 114f.
- 7) Galen. Claudii Galeni opera omnia. ed. C. G. Kühn. 20 vols. Leipzig: Car. Cnoblochii; 1821–33. 1: 367f.
- 8) 同様の概念はガレノスの他の著作においても述べられている。García-Ballester 1993 を参照。
- 9) Bylebyl 1971, pp. 483f.
- 10) Galen, Opera omnia, 8: 462–73
- 11) Galen, Opera omnia, 9: 105.
- 12) ガレノス以後のギリシア語圏で活躍した医学者らに関して、代表的な人物2名の著作を簡潔に述べておく。ベルガモンのオリバシオス Oribasius (325頃–400年) はガレノスを初めとする過去の医学者の意見を抜粋して『医学集成 (Collectiones medicae)』という作品を作ったが、部分的にしか現存しない。これを要約した『摘要 (Synopsis)』の第1巻で治療に役立つ様々な事柄をまとめている (Oribase. Oeuvres d’Oribase. trs. & eds. Bussemaker & Daremberg. 6 vols. Paris: Imprimerie nationale; 1851–76. vol. 5.). そこには運動、性交、瀉血、下剤等、空気、外用薬、入浴が挙げられている。またオリバシオスの著作に依拠して『7巻の医学要綱 (Epitome medicae libri septem)』を著したアエギナのパウロス Paulus (630年頃活躍) はその第1巻で運動、保持とその排出、空気、入浴についてを簡潔に扱っている。また発熱を扱う第2巻では過剰な熱が発生する原因を自然に沿う原因 (年齢、暑い季節や地域、熱性の気質など)、自然に沿わない原因 (通常より暑い取り巻く空気、熱い入浴、運動、食べ物、酒、温める薬品など)、自然を超越する原因 (極度に熱性の気質、体液の腐敗、精神的現象など) の3つに分けている (Paul of Aegina. The Seven Books of Paulus Aegineta. tr. Francis Adams. 3 vols. London: Sydenham Society; 1844. 1: 208.). これはガレノスの『初心者のための脈について』での説明に従ったものと考えられる。しかしオリバシオスにもパウロスにも一連の「非自然要素」という概念は現れていない。Niebyl 1971, 487f. を参照。
- 13) Ibn Abī Uṣaybi’a. ‘Uyūn al-anbā’ fī ṭabaqāt al-aṭṭibā’. ed. Muḥammad Bāsil ‘Uyūn al-Sūd. Bayrūt: Dār al-Kutub al-’Ilmiyya; 1998. p. 248f.
- 14) 正確な時期は不明だが、古くは11世紀の写本が存在する。Danielle Jacquart. À l’aube de la renaissance médicale des XI^e-XII^e siècles: l’“Isagoge Iohannitii” et son traducteur. *Bibliothèque de l’École des chartes* 1986; 144: 209–40.
- 15) Siraisi 1990, p. 58.
- 16) 元素、気質、体液、器官、能力、機能、精気の7つ。Ḥunayn ibn Iṣḥāq. al-Masā’il fī al-ṭibb lil-muta’allimīn. eds. Muḥammad ‘Alī Abū Rayyān, Mursī Muḥammad ‘Arab & Jalāl Muṣammad Mūsā. Cairo: Dār al-Jāmi’at al-Miṣriyya; 1978. p. 2.
- 17) 原語はそれぞれ、al-hawā’ al-muḥīṭ bi-abdān al-nās, mā yu’kalu wa yushrabu, al-ḥaraka wa al-sukūn, al-nawm wa al-yaqza, al-istifrāgh wa al-iḥtīqān, al-aḥdāth al-nafsāniyya である。「食べるものと飲むもの」と訳した箇所は直訳すれば、「食べられるところのものと飲まれるところのもの」であり、ガレノス『Ars medica』の「摂取されるもの」と同じく受動態の動詞を用いた表現である。
- 18) Ḥunayn, Masā’il, pp. 40–42.
- 19) 直訳すれば、「自然に依らない要素」である。
- 20) 原語は istiḥmām で、原義は「水で身体を洗うこと」である。Edward William Lane. *An Arabic-English Lexicon*. London: Williams and Norgate; 1863–93: 2: 636a.
- 21) T写本の読みを採った。使用したテキストでは「第5は睡眠と覚醒、そして排出。第6は保持と性交」としている。なお、性交の原語は nikāh, その他は前述の第3章からの引用と同じである。
- 22) Ḥunayn, Masā’il, pp. 225–27.
- 23) ここに挙げられている入浴であるが、ガレノスも

- 治療あるいは養生法の一環として入浴を重視している。『健康の維持について (De Sanitate tuenda)』ではいくつもの箇所に「身体の状態を整えるために適切にしなければならないこと」がまとめられている。例えば第2巻12章では、マッサージ、運動、入浴、食べ物、睡眠が、また第5巻2章では睡眠と覚醒、入浴、精神的現象が挙げられている。こうした事例を見ると、ガレノスの時点で入浴が「非自然要素」の概念に入り込む可能性があったといえる。Galen, *Opera omnia*, 6: 158, 313.
- 24) Diego Gracia & Jose-Luis Vidal. La “Isagoge de Ioannitius”, introducción, edición, traducción y notas. *Asclepio* 1974/5; 26/7: 267–382. Gregor Maurach. *Johannicius: Isagoge ad Techne Galieni*. *Sudhoffs Archiv* 1978; 62: 148–74.
- 25) Gracia & Vidal 1974/5, pp.329–35. Maurach 1978, pp. 157–60.
- 26) Gracia & Vidal 1974/5, *Isagoge*, p. 351. Maurach 1978, p. 165.
- 27) Maurach 1978, p. 157.
- 28) al-Rāzī. *al-Mansūrī fī al-ṭibb*. ed. Hāzīm al-Bakrī al-Šiddīqī. *Šafāt: Ma’had al-Makhtūṭāt al-‘Arabiyya*; 1987. pp. 203–29.
- 29) al-Rāzī. *al-Hāwī fī al-ṭibb*. ed. Muḥammad Muḍammad Ismā‘īl. 8 vols. Bayrūt: Dār al-Kutub al-‘Ilmiyya; 2000. 使用した版では第23巻のみ2つに分けられている。この部分はハイダラバード版 (al-Rāzī. *Kitāb al-Hāwī fī al-ṭibb*. 20 vols. Ḥaydarābād al-Dakkan: Maṭba‘at Majlis Dā‘irat al-Ma‘ālif al-‘Uthmāniyya; 1955–67.) には無い。
- 30) ここでの性交の原語は *jimā’* である。
- 31) al-Rāzī. *Libro de la introducción al arte de la medicina o “isagoge”*. ed. María de la Concepción Vázquez de Benito. Salamanca: Ediciones Universidad de Salamanca, Instituto Hispano-Arabe de Cultura; 1979. p. 34.
- 32) 原語は *al-aṭ‘ima wa al-ashriba* である。
- 33) 原語は *al-a’rād al-nafsāniyya* であり、厳密に訳すなら「精神の偶然的状態」となる。
- 34) al-Majūsī. *Kāmil al-šinā’a al-ṭibbiyya*. 2 vols. Frankfurt am Main: Institute for the History of Arabic-Islamic Science at the Johann Wolfgang Goethe University; 1985. 1: 152f.
- 35) Majūsī, *Kāmil*, 1: 154–217.
- 36) 統一して食べ物と訳したが、*ghadhā’* (栄養物) と *aṭ‘ima* (食事) が用いられている。
- 37) 原語は *al-‘awāriḍ al-nafsāniyya* であり、厳密には「精神の偶然的状態」を意味する。
- 38) Abū Sahl ‘Isā b. Yaḥyā al-Masīhī. *Kitāb al-Mi’a fī al-ṭibb*. ed. Floréal Sanagustin. 2 vols. Dimashq: al-Ma’had al-faransī lil-Dirāsāt al-‘arabiyya bi-Dimashq; 2000. 1: 121.
- 39) Masīhī, *Kitāb al-Mi’a*, 1: 254.
- 40) 部分的にだが邦訳されている。伊東俊太郎、五十嵐一。イブン・スィーナ (科学の名著8)。東京：朝日出版社；1981。
- 41) 身体的な運動と静養の原語は *al-ḥaraka wa al-sukūn al-badaniyyayni*、精神的な運動の原語は *al-ḥarakāt al-nafsāniyya* である。
- 42) Ibn Sīnā. *al-Qānūn fī al-ṭibb*. ed. Muḥammad Amīn al-Dīnnāwī. 3 vols. Bayrūt: Dār al-‘Ilm al-‘Ilmiyya; 1999. 1: 113.
- 43) 調整と訳した *ta’dīl* とは、均衡の取れた状態 (‘adl あるいは *mu’tadil*) にするという意味である。
- 44) 原語は *ikhtiyār mā yatanāwalu* である。これはフナイン・ブン・イスハークによるガレノス『*Ars medica*』の翻訳で用いられた「摂取するもの」の訳語と同じ。
- 45) Ibn Sīnā, *Qānūn*, 1: 202.
- 46) 邦訳あり。志田信男訳。アヴィセンナ「医学の歌」。東京：草風館；1998。
- 47) Avicenne. *Poème de la médecine*. eds. Henri Jahier & Abdelkader Noureddine. Paris: Les Belles Lettres; 1956. pp. 20–25.
- 48) ただし、ここでは *ḥammām* という言葉が使用されている。厳密に訳せば浴場の「使用」となる。
- 49) Avicenne, *Poème*, p. 118.
- 50) Averrois. *Averrois Cordubensis colliget libri VII (Aristotelis opera cum Averrois commentariis, Suppl. 1)*. Frankfurt am Main: Minerva; 1962. 236f.
- 51) Avicenne, *Poème*, pp. 101f.
- 52) Ibn Rushd. *al-Kulliyāt fī al-ṭibb*. eds. J. M. Fórneas Besteiro & C. Álvarez de Morales. 2 vols. Madrid: Consejo Superior de Investigaciones Científicas; 1987. 1: 227.
- 53) Ibn Rushd, *Kulliyāt*, 1: 395f.

“Non Naturals” in Islamic Medicine

Naohide YAGUCHI

Postgraduate Student, Graduate School of Humanities and Sociology, University of Tokyo

“Non naturals,” which appear frequently in the history of Western medicine, means things not controlled by human nature, contrary to natural components of a body. It covers such a wide range of factors as physiological or psychological things, and the external environment. Generally, these are classified into six categories; ambient air, food and drink, exercise and rest, sleep and wakefulness, excretion and retention, and the passions of soul. In medieval times the knowledge of these “six non naturals” constituted a kind of hygiene or regimen. People cannot avoid the effects of these elements in their lifetime, so physicians were required to learn about them not only to treat diseases but to preserve health and to prevent diseases. This became so common that it was included in the curriculum of medical schools.

Although these factors were already known to have an effect on the health of humans in the early stage of Greek medicine, it took a long time to be formed into the theory of “six non naturals.” Its origin can be traced back to Galen’s “Ars medica,” but he does not use the name “non naturals.” With the later development of medicine in the Islamic world, which received Greek medicine through translation, the number and the contents of related factors differ from author to author. Moreover, they use different names; few authors use the name “non naturals.” It seems that “six non naturals” had not been established as theory until the later stage of the history of medicine in Islam.

Key words: Islamic medicine, Non naturals, Regimen